

# 第1回中日甘藷・馬鈴薯 シンポジウムに 参加して

◎北京農業大学の正門前



Part 1

## 甘藷にかかわる研究など

農業研究センター・作物開発部 甘しょ育種研究室長 小巻克巳

はじめに

まだ夏の暑さが残る8月31日から9月2日にかけて中国北京市の北京農業大学で「第1回中日甘藷馬鈴薯シンポジウム」が開催されました。このシンポジウムは北京農業大学の劉慶昌副教授と鹿児島大学の国分禎二教授のご努力で実現したものです。

中国はサツマイモについては世界の生産量の85%を占め、ジャガイモについても世界で5指にはいるという大生産地であり、その研究勢力がどのようなものか、またどんな研究が行われているのか大変興味がありました。

出席者の名簿などがなかったもので、正確な出席者数はわかりませんが、中国側も日本に対して同じ様な興味を持たれたのでしょうか。参加者は総勢170人余、このうち日本からは30数人ですから、中国から140人程度の参加者があったことになります。

シンポジウムではまず全体会議がもたれ、主催者の挨拶の後、江蘇徐州甘藷研究所の袁宝忠氏が「中国のサツマイモの生産と研究状況」、九州農業試験場の山川理室長が「日本のサツマイモ：生産、利用と育種」、国際ジャガイモセンター中国連絡事務所のSong

Bo-fu氏が「中国におけるジャガイモの生産と利用の現状及び今後の展望」、長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場の森元幸育種栽培科長が「日本のジャガイモ：生産、利用と育種」について報告し、日中のサツマイモとジャガイモの現状について紹介しました。次いで、北京農業大学の陸漱韻教授の「バタータス節における種間及び種内の不和合性とその打破に関する研究」、同じく北京農業大学の劉慶昌副教授の「サツマイモ及びその近縁種の組織・細胞培養の進歩」、名古屋大学の中村研三教授の「サツマイモのスポラミンと $\beta$ -アミラーゼに関する遺伝暗号：サツマイモ及びその形質転換植物における遺伝子発現の調節」、内モンゴル大学のZhang Heli 氏の「実用品種から得られた形質転換植物のジャガイモ葉巻病抵抗性の解析」及び(株)カルビーポテトの知識敬道技術顧問の「加工用ジャガイモの品質評価」といった基礎的な研究分野の成果が発表されました。

その後、サツマイモとジャガイモの分科会に分かれ、いずれも遺伝資源、遺伝育種、栽培生理、病虫害、バイオテクノロジー及び加工利用のセッションに分けて進行されました。サツマイモではそれぞれ、3、25、16、5、6及び7課題、ジャガイモではそれぞれ6、7、21、2、3及び3課題が登録されていましたが、発表直前のキャンセルが相次ぎ結局8割ぐらいしか講演はありませんでした（筆者はサツマイモ分科会のみに出席していましたので、ジャガイモ分科会の様子は分かりません）。また、会議場前のホールではポスター発表も行われました。なお、筆者は「サツマイモ葉柄食用品種の育成」というテーマで口頭発表しました。最後に、各分科会で総合討

論が行われ、講演の内容をふまえて活発な質疑が行われました。

発表は多数・多岐にわたり、すべてを網羅することは容易ではありません。そこで、ここでは、全体会議とサツマイモ分科会で報告された中から特に興味があった研究報告について北京農業大学界隈の風景や様子を挟みながら紹介します。

#### 点描（その1）—北京農業大学界隈—

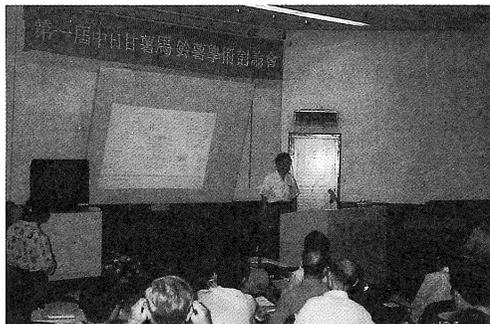
北京農業大学は北京の市街地から40～50分車で北西に走ったところにあり、いかにも市街地から少し離れた田舎という風情です。大学の前には商店街があり、野菜・果物・香辛料などを売る露店のマーケットもありました。とても雑然とした感じで、ちょうど筆者の子供の頃（30数年前）の日本を彷彿とさせました。露店のマーケットではサツマイモが500g 1.5元（1元は約12円）、ジャガイモが1元、落花生が1.3元でした。果物はたくさん並べられていましたが、リンゴやブドウは硫酸銅かと思われる粉で表面が真っ白でしたから敬遠し、「はみりり（メロンの一種）」を買いました。おいしかったのですが、値段は28元と大変高い野菜でした。商店街の中には私たちが着いた日に開店したというスーパーマーケットがあり、そこでは今人気の「減肥石鹼」が18円で売られていました。日本で手に入ると千円以上するというので、昼休みや会議の後に私たちが多くの石鹼を買ったものですから、1日で3箱目の段ボールをあけているところだと驚いていました。

#### 中国のサツマイモ生産と研究状況

##### —袁宝忠氏の報告から—

栽培面積は1960年代には933万haでしたが、1970年代後半には667万ha、1992年には606

▼講演会場の様子(鹿児島大学の国分教授が講演中)



万haと減少傾向にあります。減少分は大豆、トウモロコシなどに置き換わったとのことです。一方で、ヘクタール当たり生産量は9.6 t、15 t、17.5 tと急速に改善されています。

南は海南島から北は黒竜江省まで栽培されていますから、作型は北方春植区、黄淮流域春夏植区、長江流域区、南方夏植区と南方秋冬植区の5つに大別されます。それぞれの地域にある省の農業科学院でその地域に適した品種を育成していますが、最もよく栽培されている品種は黄淮流域春夏植区向けに1970年代後半に育成された「徐薯18」で、その栽培面積は1989年には183万haに上っています。全国の育種ネットを活用して1980年代後半に育成された「南薯88」が67万haでこれに次いでいます。

栽培技術の改善も進められてきています。サツマイモは「苗半作」というぐらい苗作りが重要ですから、北方地域では様々な温床を用いて健全苗を早く確保しています。南方地域ではこれまで畑で生育中のサツマイモの蔓先を苗にしていましたが、生育が良くないため、いもからの萌芽苗を利用するようになってきています。また、栽植密度や施肥法も改善され、病虫害の防除についても抵抗性品種の利用、健全苗の利用や苗消毒でかなり制御

されてきています。貯蔵法も北方地域では昔ながらの地下穴式貯蔵から加温式貯蔵に変わり、南方地域では貯蔵前のいもの殺菌剤処理が行われるようになってきています。

育種方法についても突然変異育種、交配方法の改善、組合せ能力の高い親系統（優れた子供を生み出す能力の高い系統）の育成などを行っています。また、1,500以上の遺伝資源が保存され、病虫害抵抗性、環境耐性、品質成分などが評価されています。

日本では最近でん粉用栽培の減少に伴って急速にサツマイモの栽培面積が減り、新たな需要開発に向け努力しているところです。中国でも同じような状況だと聞いていましたが、1970年代後半からは10%程度の減少にとどまっているところから、世界のサツマイモ生産における中国の重要性は以前にも増して高まっていくものと感じました。

サツマイモにみられる種間及び種内の不和合性の化学物質処理及び組織・細胞培養技術による克服  
一陸 淑韵教授と劉 慶昌副教授の報告から一

サツマイモにはいろんな近縁種があります。一部の種はサツマイモと交雑するのですが、ほとんどの種はサツマイモと交雑しません。日本でも、サツマイモと交雑するグループとしないグループとの間で交雑させようと研究が重ねられましたが、成功しませんでした。ところが中国では、高濃度の2、4-D (30~50mg/l) 処理で、頻度は高くないのですが、グループの間の交雑種子を得ることに成功しました。染色体の数や形態的な特徴からこれらは雑種であると結論しています。ただ、形態はかなり異常で、新しい品種の育成には利用できないとのことです。また、細胞融合法（交雑できない種の細胞を酵素で裸にして、

それを化学薬品や電気ショックで無理矢理合体させ、得られた融合細胞を培養して植物体にする方法)で雑種を作ることに成功しています。この研究はサツマイモ(染色体数は90)と染色体数が30の近縁種を用いており、雑種は120本の染色体をもってしかるべきなのですが、現実には44~50だそうです。これは、融合細胞を培養しているうちに自然に染色体が減っていったと考えられています。

種間の不和合性の他にサツマイモの中でも交雑ができない場合があります。これを交配不和合性といいます。これもNAA(ナフタレン酢酸)、2,4-D、BA(ベンジルアミノプリン)という化学物質(生長調節物質)を交配後に高濃度処理すれば場合によっては解消できるとしています。

種間の不和合性の打破については大変興味がありましたから、北京農業大学の植物遺伝育種研究室の王家旭助教授にお願いして、村田達郎氏(九州東海大学)と大谷基泰氏(石川農業短期大学)とともに実物を見せてもらいました。花の形態は近縁種そのもので、葯や柱頭がない場合があります、形質発現に異常をきたしていました。葉はやや厚く、その意味ではサツマイモの遺伝子が入っているように見えました。しかし、三人とも、2,4-Dの高濃度処理で得られた単為生殖種子である可能性もあるのではないかと感じました。もちろん種間の交雑で種子が得られたことは特筆すべきことですので、今後雑種性を検定して、疑問の残らないような形で成果が発表されることを期待しています。

点描(その2)一北京農業大学のキャンパス一

3日間は会議場に缶詰状態で、3度の食事すべて大学の中の職員食堂で済ませました

ので、サツマイモを栽培しているところはおろか、研究施設もサツマイモの交配温室と食堂への道すがら目にする建物以外は見ることはできませんでした。そのわずかな機会に見聞したことを少々。大学の中には教育、研究用の建物・施設(温室や圃場を含む)以外に、職員とその家族のためのアパートがあり、一つの小さな町のようなものでした。さらに、軍の施設が敷地の一角を占めていました。そんなわけで敷地はたいへん広く、王助教授に温室に案内されたときにも、かなりの距離を歩きました。温室の回りには作物展示圃場があり様々な作物が植えられ、雑草化した色とりどりのマルバアサガオが目につきました。

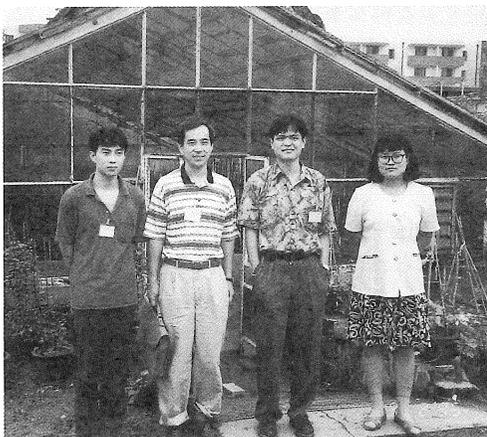
温室は写真(10頁)のようになかなか古いものですが、よく手入れされていて、整然とサツマイモや近縁種を植えた鉢が並べられていました。多くの学生が交配実験をしており、近縁種を利用した育種研究が進むことを期待させました。日本では、交配研究や近縁種研究のメッカであった九州農試の指宿試験地がなくなるかもしれない状況にあり、中国が日本に替わって、近縁種利用研究をリードしていくことになるのかと少々寂しく思いました。中国のサツマイモの病虫害抵抗性の評価法と防除法—徐州甘藷研究所のXie Yiping氏、Zhao Yune氏と江蘇農業大学のChen Xuwen氏の報告から—

中国で被害の大きい病虫害は黒斑病、茎センチュウと根腐病です。茎センチュウは日本では知られていませんが、学名を*Ditylenchus destructor*といい、茎から入り込み根を腐らせるたいへん恐ろしいセンチュウです。根腐病は*Fusarium solani*で引き起こされる病害とのことでしたが、説明を聞いているとどうも、*Streptomyces ipomoea*による立枯病のように

思われました。これらについて抵抗性の検定法を開発して、抵抗性品種の選抜を効率化し、優れた系統を育成しているとのことでした。中国のサツマイモの加工利用の現状—江蘇省農業科学院の林 長平副教授の報告から—

1960年以前は約50%が主食、30%が飼料として用いられてきましたが、工業及び農業生産の増加とそれに伴う生活水準の向上により、主食としての消費は激減し、加工用としての利用が増えてきました。現在では加工用が約50%を占め、サツマイモは食用作物というより、加工原料作物といえるまでに変わってきています。加工品としては大きく3つに分けられます。第1が工業加工品で、これはさらに①生いもまたは生切干からとられるでん粉、②でん粉から作られる糖類、③アルコールやクエン酸などに分けられます。第2が食用加工品で、蒸切干、ゼリー、春雨、チップス、フレンチフライなどで、第3が飼料用加工品でサイレージなどです。

これらの加工品の中で最も重要なものはでん粉で、生産量は毎年400万t以上になります。アルコールやアルコール飲料は年間100



▲北京農業大学の温室前で（左から二人目が筆者、その右が王助教授）

万t、クエン酸は5万t以上作られています。麦芽糖生産はたいへんポピュラーですし、糖蜜（果糖とぶどう糖の混合物）の生産量は10万tを越えています。また、春雨は200万t以上で、蒸切干などの乾燥食品は様々な種類を含めると1万t以上になっています。

このように、中国のサツマイモはわが国と同様に、貴重な資源作物としてその利用に様々な工夫がなされています。

#### 日中サツマイモ研究者の意見交換

##### —総合討論から—

総合討論は日本側からは鹿児島大学の国分禎二教授、永濱伴紀教授、九州農業試験場の山川 理室長、鹿児島県農業試験場の馬場透土壤肥料部長、そして筆者が、中国からも5人が代表して質問に答えるという形式で始まりました。

ほとんどが中国側からの質問で、日本側の代表者はたじたじという感じでした。その内容はまず、日本における高でん粉多収育種法などの育種法研究はどのようになっているのか、野生種利用の今後の展望、バイオテックが育種に利用できるのかその見通しについてであり、山川室長と筆者が回答しました。また、予算はどのようにして得ているのかといったものに加えて、最近育種学雑誌にサツマイモ関係の報告が少ないが、何か特別な理由があるのかといった、耳の痛い質問もありました。分子生物学に関する研究の進展はという質問に対しては名古屋大学の中村研三教授にお願いし、基礎的な研究は進めているが、サツマイモの形質転換系ができていないため、その先に進めないでいる。早く形質転換系ができることを期待するというコメントをいただきました。遺伝資源の保存法として試験管内保

存や凍結保存の見直しはという質問に対しては、筆者や鹿児島バイオテクノロジー研究所の下西研究員が試験管内保存については技術的には確立されているし、変異の問題もないので、システム化すればすぐにでも実用化できること、凍結保存についても技術そのものについては実用化の域に近づいているが、培養変異の問題があることを指摘しました。

もっとも活発に意見がでたのは加工利用についてでした。日本側から日本ではトウモロコシでん粉が安いのでサツマイモでん粉はたいへん苦しい状況にあるが中国ではどうか、また中国のサツマイモが日本へ輸出されると日本のサツマイモは大きな打撃を受けることになるがその可能性はという質問がありました。これに対して、山東省では原料としてはこれまでサツマイモとトウモロコシが半々だったが、サツマイモでん粉の品質が落ちるのでトウモロコシが増加してきた。しかし、中国は広いので省によってはサツマイモしか作れないところもあり、でん粉原料としてのサツマイモの重要性は変わらないと思う。そして、中国は人口が多いのでサツマイモやそのでん粉は国内消費に回されるだろうとの回答がありました。しかし、最近、中国からの蒸切干や焼酎向けの冷凍サツマイモの輸入に茨城や鹿児島の産地が危機感を強めていることを考えると日本と中国では認識にややギャップがありました。中国側からはサツマイモの加工について日本ではどのようなことを考えているかという質問があり、永濱教授と馬場部長は日本の現状と問題点を明らかにしつつ、その方向についてコメントを加えました。

おわりに

筆者にとって初めての中国でしたが、サツ

マイモに関係する研究者の多さ、研究の幅広さは注目に値するものでした。ただ、二国間のシンポジウムであるとはいえ、国際会議であるにも関わらず、会議場で英語がほとんど通用しない（日本人が中国語を勉強していけば良いのかも知れませんが）こと、英語で発表すると（日本語で発表するとごく簡単に中国語に通訳してくれる）数分もすると私語が始まること、スライドは英語でという事前の通知にも関わらず中国語のスライドで発表することが往々にしてあったことなど、まだまだ中国のサツマイモ研究者は国際化に向けての努力が必要だと感じました。

第1回のシンポジウムはこうした不満があったにせよ、日中のサツマイモ研究者の相互交流にとって大変大きな一歩となりました。また、参加者同士のつながりの輪の広がりは今後の情報交換が一層スムーズになることを感じさせました。

筆者にとって、中国のサツマイモ研究者に会えたことは当然のことながら、日本にいてもなかなか会えない日本のサツマイモ研究者が一堂に会する機会を得たことは大変うれしい出来事でした。中国側からはぜひ第2回のシンポジウムを日本で開きたいとの強い要望があり、日本側も3～4年後に日本で開けるよう努力するという返事をし、第1回のシンポジウムを終えました。このシンポジウムを開くに当たってはカルビーポテトの絶大なる支援があったと聞いています。第2回においても多方面の関係者の協力をいただき、盛大なシンポジウムが開かれることを願ってやみません。

はじめに

二年ほどまえから、以前鹿児島大学に留学し現在中国農業大学（10月1日北京農業大学を中心に他の2大学を統合して新たに発足）農学系の副教授として活躍されている劉慶昌氏から、なんとかして日中薯類シンポジウムを開きたいと言う希望をお聞きしていた。それが、昨年の6月“やりましょう。場所は北京農業大学で”と言うことになり具体化の一步を踏み出した。

とはいえ、この様な経験の無い二人であったが、幸い日本側は鹿児島大学の国分教授にお願いでき、中国側は劉慶昌氏が全てを引き受けることで出発した。

日本側からの参加については、当初全く見当もつかず、心当たりの方々に恐る恐るお願いしたところ、意外なほどの反響で後で述べるように多くの人々の参加を得ることができ

て本当に感謝している。また、カルビー、及びカルビー・ポテトからの資金援助で、会の運営が非常に楽になったと喜んでもらえた。

シンポジウムは8月31日から9月2日までの間、北京農業大学で、日本からの32名を含む170名の参加を得て開かれた。初日は特別発表9課題の発表が行われた後、甘薯、馬鈴薯の2分科会に別れて研究発表が行われた。甘薯については別に報告されるので、以下馬鈴薯の発表について気付いた点を述べてみたい。

#### 発表内容とその研究の行われた場所

発表課題を項目別、研究された場所別に表示すると（表1）のようになる。

上記の報告について、その内容の全てを紹介できれば良いが、筆者の能力をはるかに越えるので、個人的な興味をもとに若干の紹介をしてみたい。

まず育種素材関係では、ハルピンの東

北農学院で1970年代から中国各地の在来品種を集めて育種素材としての利用を開始しており、さらに野性種の利用も試みているとの報告があった。

野性種の利用については、山西省の大同にある高寒区作物研究所でも高澱粉、病害抵抗性をねらった育種について報告された。その他、張家口の奥にある霸上農業科学研究所、内蒙古自治区呼和浩特の馬鈴薯小作物研究所では、対象とする地帯の雨が少ないので、たくさんの品種

表1 発表場所別課題別一覧

研究場所	遺伝資源関係	育種	栽培	病虫害	バイオテック	加工	計
日本	1	2	1	1		1	6
CIP	2		1	1			4
黒竜江省	1	2	2				5
遼寧省			1				1
河北省	1						1
山東省			4		1		5
湖北省			2				2
広東省		1	1				2
山西省	1						1
内モン古			3		4	3	10
甘肅省		2	1				3
ウイグル			1				1
雲南省			1				1
青海省			1				1
計	6	7	19	2	5	4	

を集め耐乾性の検討を行った報告が目についた。

育種関係では、広東省で129品種を集めその適性を検討し、優良品種の選抜を行っていた。ハルピンでは4×と2×との交配から優れた品種を育成しようと研究を進めており、多くの組み合わせについてTPSとして利用する場合の評価も行っていた。最近ではメリステムを作成し、ステム・カット法で簡単にバイラス・フリー個体が得られるようになったので、TPSに対する関心は一時ほど盛んでは無いように聞いた。

栽培関係の中では、CIP北京駐在員事務所の宋伯符氏等の中国の馬鈴薯事情についての報告があったが、この報告は中国の馬鈴薯事情を知るのに大変有益である。この外では、山東省のステム・カット法による種芋栽培、湖南省のin-vitroによる薯の分化、呼和浩特での葉の栄養分析、瀋陽での有機体又は、無機体チッソの施用と馬鈴薯の品質収量との比較を3年にわたって行った結果等が報告された。また、マルチを利用すると早生化し、収量もあがったとする報告、開花抑制剤を散布したら増収したという報告があった。

病虫害の関係では、CIPの人が過去40年間の疫病の発生、及びその防除の変遷について報告された。

それによると、中国では年により場所によりどこかで毎年被害が発生しているが、特に1950年には主産地の山東省で大発生し、50%近い減収をみた。同じ年に四川省山岳地域、上海近郊にも大きな被害をみている。その後、1980年代にも大発生し、場所によっては70%近い被害が見られたと言う。その対策として、抵抗性品種の導入、菌のレースの問題、防除

薬剤など、その全般についての概要が述べられている。

加工関係では、いずれも呼和浩特の馬鈴薯小作物研究所からで、馬鈴薯澱粉の白度向上の問題、馬鈴薯を用いたスナック菓子、馬鈴薯と大豆、シロササゲを原料としたアイス・クリームについて報告された。

### 中国の馬鈴薯事情

#### A 品 種

中国の品種事情については、本誌の39号で簡単に述べたが、さらに若干の情報を追加しておく。

先ず育成場所であるが、黒竜江省の克山にある“黒竜江省農業科学院馬鈴薯研究所”は規模も大きく“克新”ナンバーをつけた優れた品種を育成している。最近育成された11号、12号は加工に向いているとの情報もある。

河北省の張家口から北に40kmほどの所にある張家口地区覇上農業科学研究所も虎頭、躍進等のすぐれた品種を育成しており、その外覇薯ナンバーをつけて多くの品種をだしている。

山西省大同市にある山西省農業科学院高寒区作物研究所も馬鈴薯の育種を手掛けており晋薯ナンバーの品種はこの育成品種である。

済南市内にある山東省農業科学院蔬菜研究所では、二期作できる蔬菜用の品種育成を行っているが、この育成品種は魯薯ナンバーで発表されている。

内蒙古自治区の農業科学研究所で育成された品種は、育成場所によって内薯ナンバーまたは烏盟ナンバーをつけて発表されている。

青海省農林科学院作物研究所で育成されたものは高原ナンバーで発表されているが、そ

のうちの高原4号は国家級品種である。

上記の他にも河南省鄭州市蔬菜研究所、遼寧省農業科学院作物育種研究所など多くの場所で育成されている。

品種の普及状況については、建国以来40年の間に100以上の品種が導入或いは育成され、これらのうち特に優れた50余品種がひろく普及し、全国面積の50%以上を占めているとの報告がある。しかし、討議の時間に確認したところ、自分の省にどの品種がどのくらい作られているかについての明確な返事は得られなかった。

これは、各省の種芋生産体勢が整備されていないため、長城沿線区の各省及び黒竜江省等一部の省以外は、種芋の殆どを他の省から購入するので、品種構成がわからないのだろうと考えられる。したがって、上記の数字が正確かどうかは不明である。

## B 種 芋

中国では早くから栽培を繰り返すことで生産力が低下する現象が目され、これを“退化”としてその原因の究明を行ってきた。その結果、ウイルス汚染がその主因としてメリステムを用いるウイルス・フリー植物の養成技術が導入され、各地でそれを出発点とする採種体系が作られつつある。

その様式は原原種→一級原種→二級原種→一級良種→二級良種と言う流れで、わが国とはほぼ同じである。そし

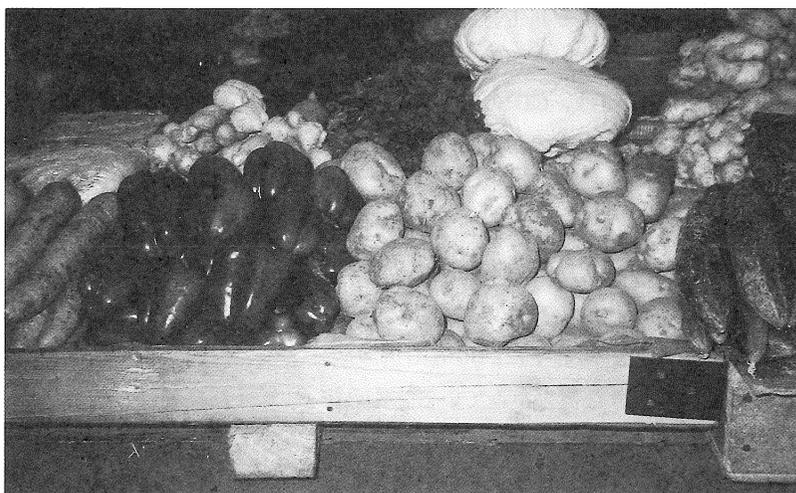
て、原原種と一級原種については、ほぼ完全に研究機関の管理下にある、採種基地あるいは良種場で増殖されている。そして、各採種段階での病薯混入許容限度についても一応の基準が示されている。

しかしながら、研究会の後のフリー討議の中で、各省の制度は必ずしも統一されておらず、今後の問題点であることがわかった。さらに、検査の方法についても問題が多く、検査員の能力向上、検査方法の近代化など解決すべき点があると考えている。

なお、まえにも一寸ふれたが、無病の種芋を得る手段として中国でも真正種子を利用する研究が一時盛んに行われたが、メリステムを利用してウイルス・フリー個体が容易に得られるようになったので、現在ではやや下火になっている。

## 今回の研究会についての感想

始めに述べたように、今回はどちらかと言えば中国側の熱意に押しきられた感じの開催であった。しかしながら、皆さんのご支援で



▲自由市場の馬鈴薯

日本からも予想以上の参加者を得、会の仕掛け人の一人として大変感謝している。

さらに、ちょっと意外だったのは、中国側の研究者もこのように大勢集まる機会は、これまでに無かったらしく、その意味でも大変意義のある3日間であったと考えている。

最終日の午後、3時間ほど自由討議の時間をとったが、馬鈴薯は品種と採種問題で時間切れになった。しかし、その間熱心な質疑応答が続けられ、言葉の問題は黒板に書く事で乗り越える等、実に充実した時間をもてた。

発表の技術については、図、表ともにさらに工夫して欲しい点が多かった。特に言葉の問題があるので、図や表で理解できるように努力すべきであると痛切に感じた。その点、日本からの参加者は、かなり洗練された発表がなされたと思っている。

今回は第一回であり、どちらかと言えば

“手さぐり”の状態で行ったので、特に宿舎については不便をかけたし、日本からの参加者の多くが手弁当で参加されるなど、仕掛け人としては大変恐縮している。

しかし、170名以上の参加者を得たことは、この会議が重視された証拠として喜んでいるが、これを機会に両国の技術交流が益々盛んになることを期待したい。

さらに、中国側は4年後に日本での開催を強く希望しており、その希望がかなえられることを祈っている。

〈付記〉今回の中国側の発表は殆ど中国語で行われ、発表時の図、表の整理も不十分だったので、その内容を理解することが困難であった。そのため、本文のうち研究会の部分は配付された論文集をもとに記述した。また、日本からの参加者の報告には触れなかったことを断っておく。



○小さい

北海道の海の幸やジャガイモが食べたくてやって来た旅行者がレストランで言った。

「おい、ウェイター。このジャガイモ小さすぎないか」

「ええ、お客さん」

「それにえぐいよ」

「ですから、小さくてよかったんじゃないですか」

○お節介

ジャガイモ大好きなA君が上京して、初めて乞食というものに会った。

「どうかこの哀れな乞食に、飯を買うお金をめぐんで下さい」

「飯よりもジャガイモを食べなさい。いろんなビタミンが豊富でヘルシー。カロリーは半分だよ」

○男爵が母？

農試職員「これは『キタアカリ』と言って、ビタミンAやCが豊富な品種で、母親は有名な『男爵』です」

見学者「母が『男爵』ですって？『メークイン（五月女王）』の間違いでしょう」

注）『メークイン』と『男爵薯』の子供ができないかと、よく聞かれますが、どちらも雄性不稔で、通常の交配は期待できない。

〈浅間和夫〉